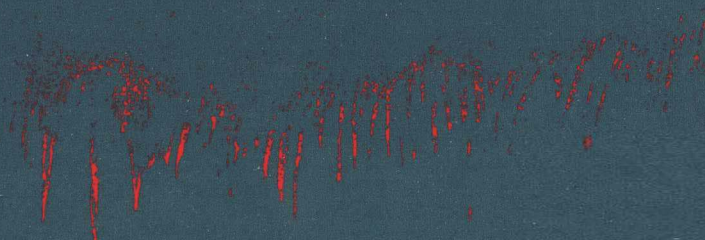
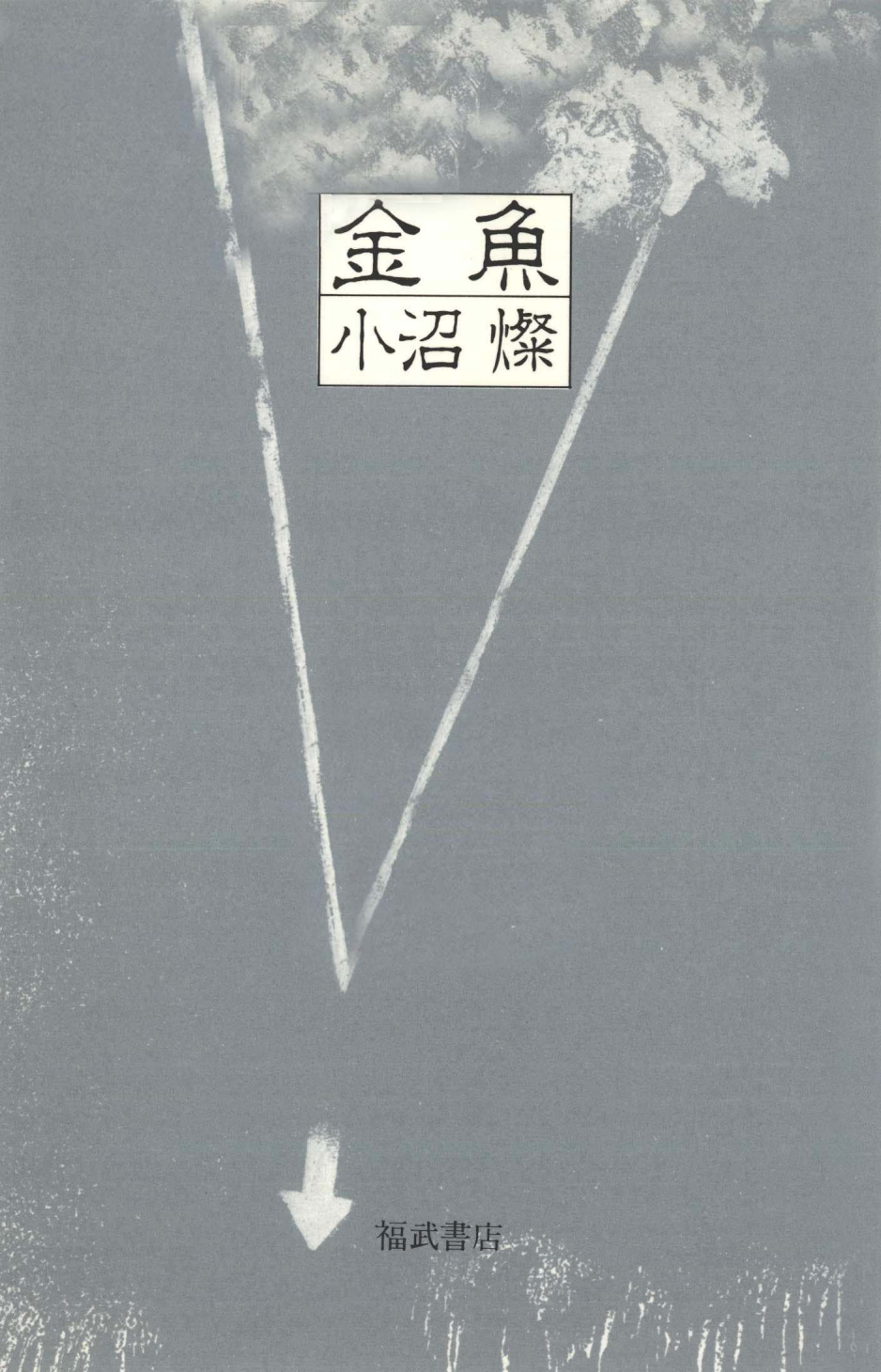


金魚

小沼燦





金魚

小沼燦



福武書店



小沼燦（こぬま・あきら）  
一九二四年、東京に生まれる。本  
名、綿貫一元。明治大学専門部政  
経科卒業。貿易公団、貿易会社、  
出版社等に勤務した後、七九年よ  
り文筆に専念。七六年「金魚」、  
八〇年「人形」により芥川賞候補  
となる。

## 金魚

一九八三年一月二五日第一刷印刷  
一九八三年一月三一日第一刷発行

定価 一、二〇〇円

著者 小沼 燦

発行者 福武 哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区麹町六一六  
千〇三電話(〇三)二三〇一二三一  
振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

(落・乱丁本はお取替え致します)

金魚——目次



突 堤	鳴 る 耳	雀	人 形	金 魚
199	173	121	53	7

画 倉本 修  
装丁 中島かほる

金魚——小沼燦第一創作集





金  
魚



広い面会室には番号札を立てたテーブルがたくさんすえてあって、番号をたどって行くと、カードで選んでもらった男とか女が見つかる仕組になっていたが、じっさいは利用者が少ないせい  
か、今度も入口から見渡したとき、すぐに相手の居場所がわかって、まっすぐ歩いて行けた。さ  
つき所長室では引合わされただけですぐ別になり、又、書類の手続きがあった。二人で話をする  
のはこれからだつた。

坐って待つている方が気が楽か、それとも、上背、胸のふくらみ具合、腰、足の太さまでいち  
はやく調べられているのがわかって伏目になったり、わざとよそを向いて遠い壁の大きい油絵な  
ど眺めながら男の場所へ行く方が楽なのかどうか。あや子はいつも後になり、男に先ず調べられ  
てから次にその男をよく知るために前へ坐つた。

五分もいると相手とどうしても合わないことがわかり、しかも理由は嫌だから嫌と言うしかな  
い場合もあるはずで、惨酷にも五分間で話を白紙にもどすことも認められていた。そのことは係

をとおして遠まわしに、上手に相手へ伝えてもらえるが、男でも打ちのめされるだろうし、女なら食事もとれなくなるにちがいないが、あや子はさすがにそんな仕打ちをやったことも受けたこともなかった。この男はことわろうと決めてからでも、ずるずる話をきき、もつとくつろげるところへと誘われれば、連立って街へ出て行くのだった。

男をほんの少しやりすごしてみて、カードの数字よりも高い背たけを感じた。横幅があり、体格がよいので大きく見えるのだ。道路へ出てからずっと男はしゃべりつづけ、勤め先の会社の資本金は一千万円であるが実質は五億円ぐらいになっていること、貿易の輸出が専門で自分は陶器を手がけているから名古屋、瀬戸、多治見などへしょっちゅう行くが、たいてい泊らずに日帰りすると言っていた。あや子はさつき面会室に入る前に係の中年女性が「今、婚約中は三組もあるんですよ」と、それとなく力づけたいのを出しながら、あたしは口数の少ない、のんびりした男が好きなんですよと、その中年女性に向って頭の中でつぶやいた。

初対面なので気をつかって、たいくつさせまいとしてのおしゃべりにしても、男は喫茶店に入ると熱いコーヒーを頼んで、それを飲むよりもコーヒー茶碗の値ぶみをはじめた。受皿をスプーンでたたいて、音色から硬さや土質をしらべることが出来ると言った。茶碗のかたちに土を焼いたものだけ売って生地屋があつて今日の相場だとこのコーヒー茶碗一組の生地代は瀬戸ならいくらぐらいで、それを名古屋まで運んで絵をつけて又焼くとすれば絵には転写紙を張るやりかた、ゴム判で押すやりかた、筆で描く面倒な方法もあるが、この茶碗は花二つの転写絵だから正味こ

これには加算されて、それに利益をのつけると卸し値はこうなり、それに、と際限のない話しぶりだった。あや子もうつかり、そうですかとか、はいとか相づちを入れてしまった。

月給は十六万円で残業手当、出張手当を加えれば二十万円の平均の手取りになって、さらに年二回賞与があることまでしゃべって、男はふと口をつぐんだ。

あなたが自己紹介する番ですよ、と男の眼が眼をのぞいたけれども、あや子はもう別れたがっていた。お金のことは、もちろん大切だけれども、自分の月給とか賞与にふれるときは顔を赤らめるような、うぶで、のんびりした、そして何か深い趣味を持っていて、その話になると声が高くなるような男があたしは好きなのに、相談所は今度も見当外の相手を押しつけている気がした。あなたの希望は充分承知していますよ、しかし、そんな育ちのよい、ふところ具合がいつもあったかいからお金勘定はさけて通れるけっこうな人間が、こんなところへ頼ってくるわけがないじゃありませんかと、ひげをはやした所長や係員が裏でわらっている気もしないではなかった。

あや子はなんのために男と会ったのかわからなくなった。男の中にいやなものを一所懸命さがしているのだ。手だつて、あたしはのんびりしたのがいい。のんびりした手だつてどうなのか。指が五本あるのを感じさせない、幼い葉っぱのかたちをした影が空気の中へとけようとしている手。手がそこから消えても、あったかみの残っている手。前にいる男の手にははつきり五本の指があつて、指は骨が目立ち、レントゲン写真でうつしてみたいに動いて、コーヒー茶碗にふれ

て音を立てた。かたい爪もあつた。あや子は自分の手はテーブルとひざとの隙間の奥深くへしまつた。自分の手もよく見ていると気に入らないが男のあんなのが電車の中でいきなり顔の前で吊革をつかんだりすると吐き気がした。男という人間がすべて気味悪くなつた。人間に、もし、手なんかなかつたら、からだ全体が魚みたいにすべっこく出来ていたら、どんなにいいだろう。それから、もし、金魚にあつたかい体温があつたら、どんなに素敵だろう。

「金魚つて、かわいいですね。僕も縁日の夜店で買って来て、飼つたことがありますよ」

あや子は心の中を見破られたのかと椅子の上で少し身を引いたが、カードの趣味の項を読んでいて、こちらの気を引こうとしていることが、すぐにわかつた。年中瀬戸物の取引で駆けまわっていて、駆けまわることが好きで、物の値段の計算やお金を数えることの性に合っている人間が水の中にいる金魚の面倒なんかどうしてみるだろう。

男は金魚を話題に持出したものの、あや子が引取つてやらないと、金魚については何も知らないらしく、唇をただあけたり閉じたりしていた。あとの言葉が出てこないのだ。

あや子の三歳になる金魚は横腹をかゆがつて小石に打ちつけていた。魚だから冬中はほとんど食わずに眠っていることで寒さを耐えていたが、その間からだがおとろえ、ばいきんに取りつかれてしまった。水を動かすと金魚は眼をさまして寒がるから水槽に手を出さずにいると水はだんだんにごつていき、ある日とつぜん春が来て、まだ寝ぼけている魚の鱗と鱗の隙間にばいきんがたくさん住みついてしまったのだ。

用心して今年も早目に春の水換えをするつもりでいたのにやられてしまった。あや子が気づいたとき金魚はもう桃色の鱗を二、三枚外してしまい、あとに白いかびがはえていた。じつとしていると死にそうにかゆさが高まっていくが、からだをよじって勢いよく小石に当るとこれも死ぬほど痛いので、どうしたらよいか迷っているらしい金魚の顔は、そのときあや子が見ていると眼を急に見張るようにした。金魚の頭はにぶいがそれでも精神はあつて、横腹のあまりのつらさに眼を光らせたのだ。そして、ひとしきり狂ったみたいに水の中で宙がえりをつづけ、底石にからだを打ちつけた。

あや子は洗面器に食塩をまぜた液をつくり、金魚にその少ししょっぱい行水をつかわせた。生れたときからここにいて人をこわがらない朱と桃色の魚は、ごつい結び目をたくさんつけた網よりもやわらかい人間の手に左右からかこわれて、時にききわけのよい幼児ほどにおとなしかった。眼やのどに、とりわけ鱗が外れて素肌になっている患部に塩分がしみだすといやがって暴れたが、すぐおさまった。白いかびが綿状になっていて落ちないのを筆で洗うと又からだをくねらせたが、やはり幼児をあつかうように、うむを言わず体を横に水にひたして治療をつづけると、魚はあきらめて背すじの力を抜き、まぶたのないあけはなしの眼はうらめしげにあや子を見上げた。

あや子は金魚が宙がえりして体を底石にこすると横腹がかゆいのだとわかり、鱗をなくしたあとが痛むのを理解しながら、では頭痛もあるだろうかと考え、頭があるかぎり、それはあると思つた。それから本で読んだ魚の便秘や腸カタル、心臓病のことなどを考えあわせてみて、金魚



の生きてゐる気持と人間の生きてゐる気持とが、たとえぼうとうと居眠りしてるときや、朝眼をさました後の、まだむずかしい世の中のことを思ひ出さない、ごく短い時間には、わずかではあるが同じになるにちがいないと考えたとき、小さい生きものの世界へ向つて眼の前がひらけた。

真水の水槽へもどしてやると金魚はしばらくぼかんとしていた。それから泳がずに尾びれを患部のある横腹の方へためしにゆつくり曲げ、反対の方へも曲げた。鱗を二、三枚外した皮膚はちぢみ、つっぱっている。あや子のお腹の脇がこのときかゆくなり、スカートの上からこすつていたが、とうとう隙間から手を入れて、かいた。はじめは気のせいだったかゆみが爪をたててもおさまらない本物になりかわつていた。金魚もあたしもそっくり同じつらさをこらえているという思いに次いで、金魚がじつさいよりも大きく見えて来た。手ですくえば胴、頭あわせて掌におさまり、朱の長い三つ尾だけがはみ出して垂れるていどの生きものが、なんだか抱けそうな迷ひを感じた。たった一尾生きのびて来た三歳の魚は人間ならあや子とつり合う年頃なのを本で読んで知つていたことも迷ひをおこすものになつていたが、この金魚は雌か雄かわからないままだった。金魚にも犬や猫の熱い体温があつたらばいいのにとねがつたとき、あや子はさすがに自分の頭をぐらぐらゆすつて正気にもどしたけれど、正気になつてさえ、あつたかい金魚の種類がもしいたら、やはり飼いたいと思つた。

男は一度だけ口にしたが金魚を飼う趣味をさけて通りぬけると、はずみをつけたように、もどどおりしゃべりはじめた。向き合つてゐるあや子が黙つてばかりいるので、気をつかつてよけい